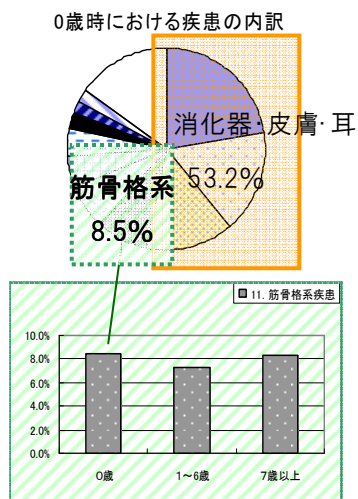




筋骨格系疾患における幼齢と高齢の違いは？

■ 筋骨格系疾患の年齢区分別罹患率



0歳の犬において、消化器・皮膚・耳の疾患に続いて請求件数が多かった**筋骨格系疾患**についてより詳細に調査した。

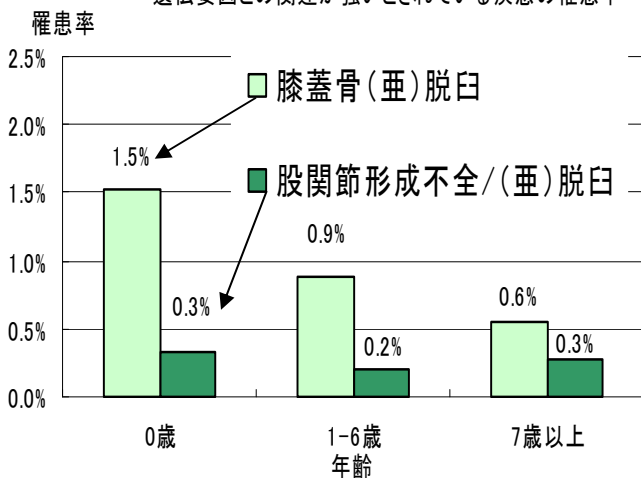
まず、遺伝要因との関係が強いと考えられている**膝蓋骨(亜)脱臼**の罹患率は、**0歳で最も高く**、その後加齢と共に低下した(図1)。

同様に、遺伝要因との関係が強いとされている股関節形成不全および(亜)脱臼の罹患率は、どの年齢区分においても0.3%程度を維持していた。

一方で、**椎間板ヘルニア**の罹患率は**加齢と共に顕著に上昇**しており、**関節炎**の罹患率も**加齢に伴う上昇**が見られた(図2)。また、骨折の発生率は、0歳が最も高かった。

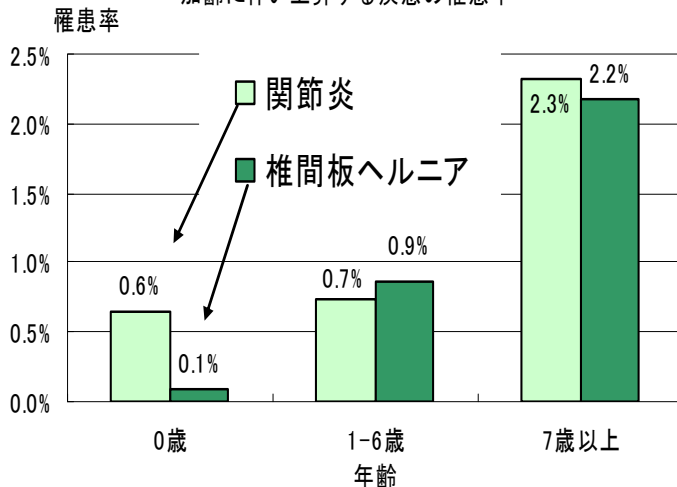
【図1】

遺伝要因との関係が強いとされている疾患の罹患率



【図2】

加齢に伴い上昇する疾患の罹患率



※ 2006/10/1～2007/9/30までの1年間に契約を開始した犬、227,876頭を調査

※当該疾病について1頭につき1回以上の請求があれば「1」とカウントした。 罹患率＝当該疾病に対する請求頭数／契約頭数

《筋骨格系疾患》のうち

幼齢では、膝蓋骨(亜)脱臼

高齢では、椎間板ヘルニアと関節炎

に注意！

